

一番茶句会報

平成二十九年
十二月号
2017
(587)

花村富美子さん新同人おめでとう

磯田 なつえ

この度、花村富美子さんが新同人に推挙されたことは、静岡支部にとつて久々の朗報で、この朗報は八月末のある日、主宰からの突然の電話によつてもたらされました。

ご本人にとつては喜びと同時に、えっ大丈夫？楽しみでやってきた俳句が重荷になるのでは？時間が経つにつれてそんな気がかりが持ち上がってきました。これは同人になつた大方の人が通る道。主宰もそんな気がかりは軽く受け流し強力に押ししてくださいました。富美子さんもお受けするからには、一生懸命尽くしたいと真っ直ぐな気持ちを伝えてくれました。『ひとり句会』は、富美子さんの書道教室の生徒さん達により「風」同人の増田昭子さんの指導で始まつたと聞いています。以来二十六年余り、幹事として強い牽引力で、全国大会への参加、新年大会の運営、勉強会や吟行会への参加など、その結束力が目立っていました。静岡支部にとつて、強力な助っ人になること請け合い、仲間たちは期待しています。

予想にたがわず、早速同人句会に出席され、また、編集会にも顔を出され作業を手伝われました。富美子さんは人一倍気働きの人で、しっかりと自分の考えを持った上で、その場に合った活動が爽やかにできる人です。

ご本人は今まで書道があるから、俳句は遊び」と軽い気持ちで続けてきたと心配げに口にされますが、自分のことだけでなく、仲間のために行動を重ねる中で、自然と作句力も備わってくると思います。素晴らしい喜寿のお祝いとなりました。お忙しいですが、食事はしっかりとつて、ご活躍をお祈りしています。

私の決意

花村 富美子

人生には、思いも寄らない出来事があるものですね。今回の新同人への推挙は、皆様驚かれたと思いますが、当の本人が一番びっくりしております。皆様にお祝いや励ましのお言葉をたくさん戴き、誠に有難く感謝で一杯です。同時に、大変なことになつたというのが本音です。伊吹嶺の俳句が好きで、句会が楽しくて、句友が大好きな私は、長い年月を一番茶の会員として安住しておりましたが、この度、同人を拝受することとなり、お受けしたからには、先輩同人の足を引っ張ることの無いように努力する所存です。

同人の皆様が暖かく迎え入れて下さり、たいへん嬉しく、先輩の培つてこられた一番茶をしっかりと継承し、自覚をもつて行動することが大切と痛感致しました。一日も早く一番茶の為に役に立つ同人になれるように努力致します。今は小さい苗木でも、少しずつ成長し、やがて瑞瑞しい芽を出し、枝葉を伸ばし、緑豊かな木に成長出来たらと、夢見ている新同人です。

会員の減少や高齢化等の課題も多い現状ではありますが、支部長を中心に同人、会員が手を取り合つて、より良い一番茶になれるように願っております。ご協力の程よろしくお願い致します。

自選 十句

山の辺にふふみて甘し野の莓

行行子激しく鳴きて雲動く

細身なる観音像や合歓の花

二日はや手習ひの子を励ませり

糶田に高き糶や大龍勢

片減りの白きサンダル夏惜しむ

冬菜畑土くろぐろと富士の裾

正面に据る大富士葱坊主

紫蘇の実の漬け方談議歩のゆるむ

重なりて知恵の輪のごとみみず涸る

新同人を祝う

中村 たか

花村富美子さんと言えば、まずお綺麗な方と目にかびます。お習字の先生と、お聞きしていたのですが、一番茶の俳句会に入られたとお聞きして嬉しく思ったものです。短冊を書くのに困っていた私は、早速先生の教えを乞いました。花村さんの俳句に「二日はや手習いの子をばげませり」と言うのがありますが、子供さんから老人まで、幅広い方に慕われていらっしやいます。指導力と言えば、皆さんの認めるところです。伊吹嶺記念大会へ向かうバスの中で俳句はまだまだですが、皆様の為に一生懸命勤めます。これから見ていてください」と頼もしい挨拶をされ全員明るい希望を持ちました。その明るさで皆を引っ張って下さることを心から願っています。

松本 恵子

九月の句会の時、支部長の磯田様から、花村富美子様が伊吹嶺の全国大会で同人に推挙されるお話がありました。今年こそは同人をと思っていましたので、皆して大喜びしました。はとり句会の幹事として句歴も長く、また長年書道教授としての指導力もあり、一番茶句会のレベルアップには最適です。私は、同人は小間使いのようなもの」と言われた夏目隆夫先生のお言葉に甘えて過ごして来ました。富美子様の笑顔と指導力で、静岡の句会に新たな風を吹かして下さい。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

坂本 操子

一番茶句会に待望の同人誕生です。ご本人は大いに逡巡されて受けられたと伺いました。嫺やかな物腰、凜とした態度、確りした意見を述べられます。長年の書道教師としての指導力は抜群です。幹事として細かい心遣いで句会を支えて会員の信頼も厚い。これからは一番茶句会に新しい風を吹き入れて下さい。

山本法子

私が富美子さんを知ったのは、何かの俳句大会で一緒に詠草のお手伝いをした折でした。何と美しい字を書く方だろうと、羨ましい気持ちになりました。今は亡き浅場芳子先生が、お習字を教えているのよ」と教えて下さり納得。私の憧れの人となった富美子さん。以前、書道を習い始めの頃、気が付くと牛乳配達の来る時間だったわ」と、話された事を覚えています。頑張り屋の富美子さん。健康に留意して、一番茶の発展のために一緒に努力しましょう。よろしくお願い致します。

多々良 和世

はとり句会が発足して二六年目。待望の同人の誕生大変喜ばしい事です。富美子さんは人望、統率力があり座を明るくします。私達も精進を心掛けますので、一緒に前に進みましょう。

藤田 幸子

お名前どおり花のある富美子さん。はとり句会に大きな花が咲きました。これからも会員がお互いに切磋琢磨し、より良く楽しい句会に発展するよう願っております。

神尾 知代

待ちに待ったはとり句会からの同人誕生バンザイ！これまでのように、これからも私達を厳しく優しく導いて行ってください。筆を揮う手、句帳を持つ手、どちらも益々のご活躍を。

新川 晴美

伊吹嶺二十周年記念の年に同人になられお喜び申し上げます。増田昭子先生と書道の関係ではとり句会誕生。包容力のある花村さんです。一番茶句会の同人期待しています。宜しくね！

谷津 政子

新同人誕生。心よりお祝い申し上げます。常に細やかな心配りと統率力で、はとり句会をまとめて下さり大感謝です。何より健康に留意されて益々のご活躍期待致します。

橋本紀子

成るべき方が成られた」と心底思いました。優れた感性の持ち主、亦包容力のある暖かなお人柄。期待はふくらんでおります。これからも伊吹嶺・一番茶句会の為に御指導の程お願い申し上げます。

立川 まさ子

私の病が判明した時、富美子さんのお話を聞き勇気付けられました。優しい気配りの方だと実感しました。又、長い間幹事さんを務められ頭が下ります。お身体に気を付けてご指導お願い致します。

下河辺 実乃里

ご家族への優しさのあふれた句、書道の師ならではの句が、のびやかで上品な書とともに心地良く心にひびきます。

・私の好きな句・十月号より

勝見 秀雄

断崖を打つ白波や雁渡し

藤田 幸子

秋高し筏下りのしづき浴ぶ

漆畑 一枝

秋蝶の翅を休めり夫の供華

坂本 操子

退院の夫と眺むる十三夜

花村富美子

木洩れ日の照らし出しをり初紅葉

磯田 秀治

静岡同人句会

No. 83

H・29・12・2

祝宴の大合唱や室の花

富美子

古里へ向ふ単線蜜柑山

法子

木の葉散りつぐ急礮の鉄鎖

操子

甲羅干す亀と目が合ふ小春かな

たか

雨上がる夕陽の町に雪螢

恵子

焼杭をつくる煙や黄落期

なつえ

(山本法子報)

もちの実句会

No. 550

H・29・12・16

絵を描く青年黄葉降る中に

磯田 秀治

そぞろ行く落葉の匂ふ昼下がり

粉粉に踏まれし銀杏落葉かな

伊坂 壽子

枝先の一枚震ふ冬紅葉

港より望む聖岳の雪化粧

そよ風に漂ふかほり榎櫃の実

赤き頬して媪酌む新走

勝見 秀雄

初しぐれ止まりしままの観覧車

父の忌や薄味に炊く煮大根

山本 法子

冬晴や鉄塔上る人の影

流星を見たりと夫の弾み声

黄落や白きドームの旧庁舎

磯田なつえ

在りし日の駿府城絵図冬紅葉

散り尽す精子発見てふいてふ

(山本法子報)

瀬名笹百合句会

No. 417

H・29・12・18

バス下りて夜寒感ずる酒帰り

大石ひさを

秋寂びや池面に映る富士の山

冬隣酒と魚で楽しめり

閉ざされしままの旧家や葛紅葉

漆畑 一枝

長き夜遺影の母に声かくる

赤み増す姫沙羅の幹冷たかり

盛りあがり餌に食ひ付く冬の鯉
餌に寄る鯉の大口小六月

冬浅し雀の餌を朝と夕

人影のなき宿坊や紅葉散る

声かけて抜きし大根貰ひけり

身延山真つ赤な赤き実南天

冬の夜添寝の猫の寝息かな

伊勢内宮時雨玉砂利五十鈴川

こがらしや風の闘い夜明まで

古民家の修復成りし白障子

焼藪の匂が風に春雷碑

マスクして眠る下校児バスの中

大森 弘子

前田 二三

片井 克子

松本 恵子

松本恵子報

辻 桂子

橋本 紀子

松永 和子

吉田 明美

宮島の秋天を突く大鳥居
山紅葉山伏の声こだまする
秋天を焦がせり護摩の火柱よ
冬桜ほつほつ咲けり奥の院
小春日や外湯をめぐる下駄の音
知恩院に散華のごとく木の葉舞ふ
同窓の友と一献紅葉宿
刈り伏せし土手にあざみの帰り花
ふるさとや海辺に続く大根畑
消防車救急車行く冬の夜
講釈を聞いていただく郁子の種
山の市大根どれも泥のまま

安西句会

No. 340

H・29・12・3

夕富士の肩へ消ゆるや冬の雁
茅葺や木戸日溜りに石露の花
SLの終着駅や吊し柿

十二月八日未明の救急車

夫になき月日を生きて今朝の冬

冬董古墳へつづく女坂

干柿の夕日を浴びて飴色に

柚人の訃報受くるや冬満月

小寒や野良に煙の高く上ぐ

山里の人と触れ合ふおでん鍋

雪虫が胸にとび来る裏通り

高干しのそばの香灰か山の晴

つつ抜けの空の碧さや神無月

献燈の連なる路や紅葉散る
廃業の医院の庭や花八つ手

渡辺 健司

菊山 静枝

佐藤 博子

立川まさ子

坂本 操子

佐藤博子報 4

谷津 政子

藤田 幸子

多々良和世

神尾 知代

はとり句会

No. 319

H・29・12・8

十二月花屋の担ぐ松の枝

玉砂利の筋目正しきもみぢの葉

ちらついて笹子鳴き継ぐ柚の庭

冬ぬくし児の指型のきなこ餅

寒禽のこぼす電子のやうな声

みくじ付き干支の犬買ふ小六月

ビル街に小さき鳥居や石露の花

手水舎の柄杓に一葉散紅葉

木の葉散る山城址へ登り口

冴え渡る看取りの窓の鎌の月
冬の夜や告知の医師の淡々と
気づかれて作り笑ひや帰り花

大判の肩掛かるし誕生日
蜂蜜を加へ勤勞感謝の日
枯かづら魚の影濃き丸子川
霜晴や四角に積みし杉丸太
湯気立てて深川飯の蒸し上がる
ページ繰るおさげの少女木の葉降る
寒禽の声の鋭し古墳山
日展を出づれば路地の冬灯

新川 晴美

磯田なつえ

花村富美子

磯田なつえ報

樟ヶ谷句会 No. 148

H
29
12
21

斎藤真理子

土本かず子

下河辺美乃里

磯田 秀治

磯田なつえ

中村 たか

息白し前かがみなる中学生
寺町の続く土塀や枇杷の花
禅寺へ続く参道実南天
星形に切り貼り終へる白障子
北風や電飾灯る一軒家
重たげに葉付大根持つ女
鯛焼を背広姿の頬ばれり
鎮守府の落葉浴びをり芭蕉像
舞鶴の岸壁に立ち冬の雨
お参りの列へきらきら冬日差
踏みつぷす櫛の実軽き音したり
星飛ぶてふ夜を灯して調べもの
掌にのこる旅のひと齣棋櫃の実
オリンピックまでは生きたし日記買ふ
多羅葉の落葉ハートの描かれあり
年詰まる修復成りし十二支像

下河辺美乃里報

かんがるー句会 No. 112

H
29
12
14

西川満寿美

渡辺 公美

小林 智子

杉山 美波

勝見 秀雄

中村いく代

磯田なつえ

小林智子報

番町句会 No. 54

H
29
12
15

前田 恭子

煙突の街に見上ぐる師走富士
艶やかや越後に送る箱蜜柑
越後より電話の便り雪便り
夫作る卓の牛鍋猫覗く
足早の都会の人や木の葉雨
忙しなく家事をこなせり冬の夕
足元に音立てて寄る柿落葉
雪化粧して青空へ富士映ゆる
大根穴よちよちの子の赤きじよろ
凧やおでん抱へて夫帰る
小六月舌なめらかに紙芝居
オリオンや米国からの子のライン
初雪の赤石岳や空の涯
植林を抜けて明るし冬紅葉
霜柱ざくざく踏んで登り道
冬枯の林へ不法投棄かな
膝を立てて毛布を被る女学生
冬初め母に似て来し指の節
大枯野ゆつくり移る雲の影
外苑の黄葉踏みしだかれにけり

ばつと咲き香り出したり野水仙
 山茶花の垣根の向かう窓開く
 お見舞に友に送れり冬苺
 それぞれに冬菊挿せり義士の墓
 早早と女ばかりの年忘
 青空へ枝の広がり冬木立
 スケートの子ら大笑ひ転んでは
 ふんはりと生垣被ふ散紅葉
 浄財で建つ丈和の碑師走富士
 かりがねの羽撃きをりぬ群なして
 冬山路ミラーを照らす入日かな
 喰はれたる黄の千両を囲ひけり
 短日の湖畔に赤き鳥居かな
 シクラメン床暖房の子の新居
 冬ぬくしダックスフンドのねまりをり
 発掘の天守閣より師走富士
 綿虫のよく舞ふ夕べ訃報受く

向日葵句会 No. 27

H・29・12・13

肩まるき利休の花入お茶の花
 奥千本うすむらさきの冬木立
 冬空へ梯子車で切る楠の枝
 散り残るもみぢの枝へ冬芽立つ
 银杏落葉池一面を覆ひけり
 寒菊や友の遺影の片えくぼ
 紅葉散るどつしり座る裸婦の像
 蛸つぼの積まるる港冬の晴

関根 幸子

池村 明子

八木 洋子

佐藤 ハル

榎戸万里子

磯田なつえ

山本 法子

前田恭子報

橋本 紀子

藤田 幸子

佐藤 博子

下河辺美乃里

冬耕の鋤ふる夫の影の濃し
 冬風や伊豆半島のくつきりと
 屋根替の済みたる旧家小六月
 冬温し友ちりめんの獅子頭
 閃閃と濛の細波冬うらら
 引き売りの目出し帽子の息白し
 屋敷神残る更地や実南天
 年賀状転居のことも書き添へり

レモン俳句教室 No. 33

H・29・12・13

佐藤博子報

多々良和世

立川まさ子

土本かず子

坂本 操子

松永 和子

池村 明子

西川満寿美

前田 恭子

八木 洋子

斉藤真理子

榎戸万里子

磯田なつえ

枇杷の花こぶし広げてにほひ初む
 大ぶりの青磁の皿に鱒のかま
 冬ぬくし寝返りの子の力み顔
 干蒲団雲の行方を追ひゐたり
 蜜柑手に一人厨に読む俳誌
 ビル窓の冬日明るし美術館
 夕暮の路地へ舞ひ込む枯葉かな
 オカリナで友を悼むや冬初め
 歯切れよき女嬸家年忘
 枝切りて冬木となりし空広し
 微笑める友の遺影や夜半の冬
 小春日や腕にずつしり宮参り
 木枯や仙石原に色失する
 数へ日や施設の老の日を忘る
 大黒天撫でて年末宝籤
 桧葉敷いて松茸一つ朱塗盆

◇兼題 鱒 枇杷の花 短日 で作句。俳句の基本形 (物仕立て
 季語の命を描写する句) 中日俳句教室講義録 05・5・17 を読む

前田恭子報

私のホームグラウンド

蕨科川の土手に行く

新川 晴美

家から五分程で蕨科川の土手へ出ます。いにしえの歌枕木枯の森を右に見ながら牧ヶ谷橋を渡り、西校までの往復四キロ程が私の吟行地です。二十余年間に活字となった句は百以上、一冊の句帳になりました。

一句一句が私の分身、足跡が垣間見られます。

朝やけを染めて拵がる鬨雲

駿河湾より拵がる鬨雲は動く気配もなく美しい。朝日を受けて金色に染まる。大自然の真つ只中に吸い込まれる思いがします。昔もこんな鬨雲が浮かんでいたんだろうな。

西校の裏の土手に立つと正面に富士山が目飛び込んできます。しばし足を止めてその美しさに圧倒され、心を委ねます。桜どきは校舎脇の土手に、枝を張る並木の桜がみごとです。

九月第二日曜日は木枯の森の八幡祭。祭を告げる昼花火と共に多くの人の見守る中、神輿は清めの為に川の深みに足を掬われながら渡御、八幡神社に参詣する。温暖化で不安定な気候、災害も心配、安心して暮らせる日々でありたいと願いながら私達も荒瀬に架けた仮橋を渡り参詣する。

ほろほろと朝の河原に雉の声

水の嵩ひきし河原に河鹿笛

新涼へ百羽のレース鳩放つ

暴れくる秋の出水の泥くさし

有明の道をとぼとぼ恋の猫

今年一年の「番茶」

一月 新年俳句大会 於クーポール 西十一名参加内不在五名

栗田やすし主宰御臨席 当番安西句会

二月 第一回幹事会 新年大会反省、事業計画、予算、総会吟行句会計画、「番茶」手作り検討 出席十一名

三月 栗田主宰第二句碑除幕式 於岐阜市伊奈波神社

参加十七名

四月 「番茶」第七回総会

掛川城周辺吟行句会

於竹の丸ギヤラリー 三十名参加

六月 第二回幹事会 総会反省と来年度計画、「番茶」手作り具体化決定、合同鍛錬会予定 出席十一名

六月 俳句協会俳句大会 於あざれあ

六月 俳句協会賞 ねりんピック派遣) 一名 入選 一名

六月 静岡関東合同鍛錬会、鎌倉市寿福寺、由比方浜、長谷寺

参加一日目十三名二日目十名) 関東十三名参加

九月 秋田ねりんピック俳句交流大会 准賞 一名

十一月 県俳句協会中部吟行大会 登呂遺跡) 於あざれあ

俳句協会賞 一名 文化協会賞 一名

優秀賞 一名 選者特選 延六名

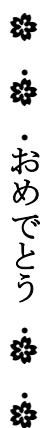
十一月 伊吹嶺同人会総会 於クラウンホテル 参加五名

伊吹嶺二十周年記念俳句大会 於ヒルトン名古屋 参加十

八名、不在投句十名 特選 一名 入選延六名

十二月 静岡市民俳句大会 於葵小学校 一般の部入選 二名

新同人推挙・卒寿祝 今瀬剛一講演・来賓多数・祝賀会



静岡市民俳句大会 十一月十日開催

入選 命名の候補連ぬる良夜かな 齊藤真理子

入選 梅雨の蝶虚子の矢倉を一巡り 磯田 秀治

「一番茶」作品鑑賞 十月号

中村 たか

義元の御廟落慶秋日和

伊坂 壽子

今年の秋臨濟寺に木の香も新しく、今川義元の御魂を祭る御廟が建てられ、落成式には多くの人々が参列された。その時の一句かと思う。句意が簡潔に表現されて弛みがない。「落慶」の言葉を見付けたのがよかった。秋日和の季語も品良く句を引き立てている。

金木犀ひよこの色の産着干す

松永 和子

ひよこ色と聞いただけで可愛いお孫(？)さんの様子が浮かぶ。干し上げた庭の金木犀の花色と同じだ。その甘い香りが読む者まで幸せな気分にしてくれる。

沖待ちの船に灯の入る十三夜

菊山 静枝

沖待ち船は船舶が港へ入れない時に、沖合で待機している事を言うのだが、抒情を誘う言葉である。その船に灯が点りはじめ、折しも今夜は十三夜。美しい月が見られるだろう。一句の流れが良い。

海沿ひの二両電車や月まろし

藤田 幸子

宮沢賢治の銀河鉄道の夜を想い浮かべた。「海沿ひの」だから、作者はこの景色を離れた場所から詠まれたかと思う。東北か、日本海側か、鄙びた海辺を走る電車。月まろしが詩情を誘う。

入賞の知らせを受くる菊日和

斎藤真理子

俳句をする者にとって投句した句が入賞すると言う事は、はげまされた様で嬉しいもの。斎藤さんは句歴も浅く初めて投句されたと聞きました。入賞した喜びを素直に詠まれて共感を覚えます。皆さんもいろいろな機会を捉えて投句してみませんか。

☆・☆・☆・あとがき・☆・☆・☆

早いものでもう今年も終わりです。手作り句会報となって半年並々ならぬ磯田支部長の努力と編集部以外で句稿をパソコン入力して下さった会員の方々の協力の結晶と感謝しております。来年は一番茶句会報が六〇〇号を迎えます。輝かしいことです。どのように迎えるか皆さんのご意見をお聞かせ下さい。一番茶句会報についても、ご要望、アイデア等を編集部までお寄せください。ご協力をお願い致します。

法子

平成 29 年「一番茶」句会一覧

句 会 名	開催週	開催場所	開催時間
もちの実	第3土曜	杓子庵(新聞)	13時
瀬名笹百合	第3月曜	瀬名中央町会館	13時30分
安西	第1日曜	番町市民活動センター	13時30分
はとり	第2金曜	花村富美子宅(羽鳥)	13時
樟ヶ谷	第4木曜	杓子庵(新聞)	13時
かんがるー	第2木曜	杓子庵(新聞)	13時30分
番町	第3金曜	番町市民活動センター	18時30分
向日葵	第2水曜	番町市民活動センター	13時30分
レモン俳句教室	第2火曜	番町市民活動センター	9時
同人	第1土曜	杓子庵(新聞)	13時

一番茶句会報 12月号(587)
 平成29年12月31日 発行
 発行責任者 磯田なつえ (☎054-278-7443)
 〒421-1201 静岡市葵区新聞458
 編集部 山本 法子(部長)
 操子・美乃里・博子・明子・和世
 印刷 番町市民活動センターにて印刷